

事業実施報告書

- | | |
|-----|------------------------------------|
| I | スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び |
| II | マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成 |
| III | スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築 |
| IV | 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成 |
| V | スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成 |

道府県・政令市名【 香川県 】 香川県立坂出高等学校

1 実践テーマ	【 I・III・V 】
2 実施対象者	香川県立坂出高等学校 第1学年 265名、保護者2名 生徒会、地域の中高校生
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (ロングホームルーム (以下、LHR)) ② 行事名 (坂高祭「オリパラ展」) ③ その他 (人権講演会) (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 (ドイツスポーツ少年団との交流)
4 目標 (ねらい)	(1) オリパラ新聞制作や障がい者スポーツ体験、講演会を通じて障がい者スポーツに対する理解を深め、共生の大切さを学び、そして自分の生き方を考える機会とする。 (2) 講演会を通じて、アスリートの生き方やスポーツに関する様々なキャリアを学ぶとともに、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会開催を契機に、生涯を通じたスポーツへの主体的・自発的な参画と、その発展に寄与する人材の育成を図る。 (3) 障がいのある人が住みやすくなるために、社会はどう変わらなければならないかを考える機会とする。
5 取組内容	1 第45回 日独スポーツ少年団同時交流会 実施日：8月2日(木) 9:20~12:00 ドイツのスポーツ少年団(高校生)と本校生徒会がボッチャを通して交流した。  2 坂高祭「オリパラ展」9月8日(土)、9日(日) 一教室内に、以下の展示を行った。 (1) オリパラ新聞制作 第1学年7クラスホームルーム委員(以下、HR委員)各4名の計28名が以下の6つのテーマの中から1つテーマを選び、夏季休業中に新聞を制作し、展示。 ・パラリンピックとは ・パラリンピック競技種目

- 多様性の理解
- 東京 2020 大会エンブレム・マスコットについて
- オリンピック・パラリンピックボランティア活動について
- 大会会場について



～新聞制作に携わった HR 委員の感想～

- このような機会がなければパラリンピックについて知ることはなかったかもしれない。大切なことは、知ることから始まると感じた。
- 私自身知らないことがたくさんあって、パラリンピックについて知るきっかけとなった。また、新聞を制作したことで人に伝えられることがとてもうれしかった。

(2) 「パラリンピック種目を知ろう！」コーナー

- ① 東京都八王子市国際スポーツ大会推進室からパラリンピック競技紹介データを借用し、展示。
- ② 公益財団法人日本障がい者スポーツ協会から、ロンドン2012パラリンピック競技大会の写真パネルを借用し、展示。



競技紹介



写真パネル

(3) シットイングバレーボール&ボッチャ体験コーナー

坂出市社会福祉協議会からボッチャを借用し、実施。



シットイングバレーボール



ボッチャ

(4) クイズで知ろう！パラリンピックスポーツ

国際パラリンピック委員会公認教材「I'm POSSIBLE」を活用し、啓発を行った。



(5) 「夢に向かって 車いすアスリートの挑戦 副島正純」

(早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター制作)
視聴コーナー



3 SAKALYMPIC

クラス対抗シッティングバレーボール大会

実施日：9月26日(水)、10月17日(水)、24日(水)

実施時間：15:30~16:20 LHR

6人~7人1組のチームを各クラス4チーム作り、クラス対抗トーナメント戦を実施した。



～生徒の感想(抜粋)～

- ・パラリンピック競技はテレビで何度か見たことがあるが、するのは初めてだった。体験してみるととても難しかった。
- ・障がい者の立場にたって考えることのできるいい機会になった。障がいがある人でも同じようにスポーツを楽しめることは大切だと感じた

4 人権講演会

実施日 1月16日(水) 14:30~16:00

講師 副島正純 さん (車いすマラソン選手)

演題 「挑戦 ～今、私にできること～」

23歳の時、事故により車いすの生活となる。入院中に障がい者スポーツと出会い、スポーツの楽しさに魅了され、車いすマラソンを開始。アテネパラリンピック 1600m リレー銅メダルを獲得した。その後4大会連続パラリンピックに出場するとともに、2014年から一般社団法人を立ち上げ、車いすの子どもたちが世界レベルの競技者を目指せるような環境の提供と指導を行い、車いすアスリートへのチャレンジをサポートしている。

講演会では、「障がい者らしく生きる必要はなく、好きなことをやれば一人の人間として格好よく生きられると分かった。車いすが夢と自信と出会いを与えてくれた」と話した。また、講演会の中で希望者2名が競技用車いすに体験乗車した。「パラリンピックに対する興味が湧いた」、「副島さんを応援したい」等のコメントも多くあり、生徒のパラリンピックの認知度が上がった。

	<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">講演会 四国新聞記事 (2019.1.17)</p> <p>～生徒の感想(抜粋)～ 怪我をした副島さんを前向きにしたのがスポーツであると聞いて、スポーツには人を笑顔にする力があると改めて感じた。自分の好きなこと、目標に向かって、向上心を持ち必死になって、「今」を生きている副島さんに感動した。</p>
6 主な成果	<p>人権・同和教育の立場からパラリンピックに焦点をあて取り組んだ。オリパラ新聞は、生徒目線で制作され、多様な記事を展示することができた。</p> <p>シッティングバレーボール体験後のアンケートでは、「オリンピック・パラリンピック並びにスポーツの意義や価値等に対する理解・関心が高まりましたか」という問いに、「非常にそう思う」が39%、「ややそう思う」が55%であった。観るだけでなく、実際に自分で体験することで、障がい者スポーツを知ることができ、理解が深まった。</p> <p>講演会では、パラアスリートのお話を聞き、障がい者スポーツを知り、障がい者の努力やそれを支える仲間・家族との関係など、大切なことを多く学ぶことができた。今までオリンピックやパラリンピックについてあまり興味を持っていない生徒が、東京大会を実際に見てみたいし、テレビを観戦して応援したいという意欲を持った生徒が出てきたことは、実施した成果の表れではないか。</p>
7実践において工夫した点 (事業の特色)	<p>(1) 第1学年各クラス4名のHR委員計28名を中心に取り組み、それを第1学年全体、学校全体に広めようとした。</p> <p>(2) 講演会後に感想文を書き、振り返りの機会を設けることで、講演会で学んだことをまとめ、自分の今後の人生にどう活かすことができるかを考える良い機会をなした。</p>
8主な課題等	<p>HR委員を中心とした1年生の取組であった。この活動を学校全体に広めるために様々な授業(体育など)の中でオリンピック・パラリンピックを題材として積極的に取り扱いをするよう促すことで、理解の深化を図らせることができたならより良かった。</p>
9来年度以降の実施予定	<p>今年度の成果と課題を踏まえた上で、来年度以降も改善を図って実施していきたい。</p>